

第 16 節 血液確保

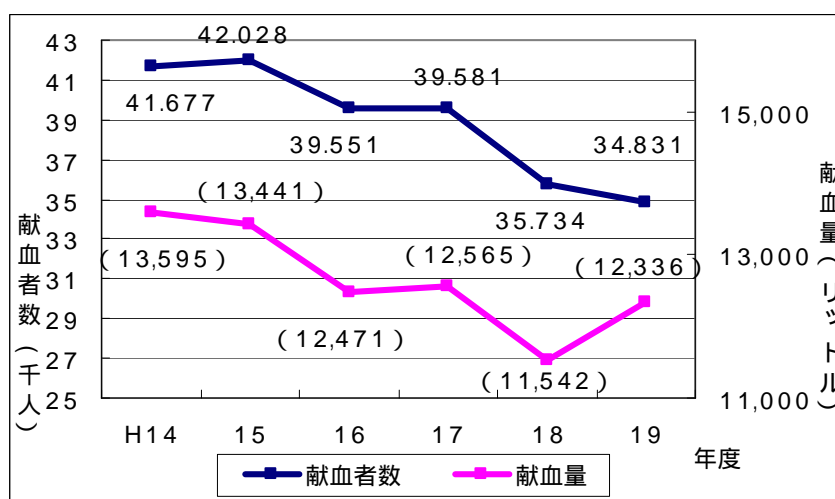
少子高齢化の進行に伴い、県内の献血可能人口(16歳から69歳)は年々減少しており、また、若年者の献血離れや海外渡航歴による献血制限の強化の影響などによって、献血者数は年々減少しています。一方、高齢化の進行や医療技術の向上等により、血液の需要は増加する傾向にあります。その結果、県内で必要とされる血液を県内献血だけでは賄いきれず、約1割を県外に依存せざるをえない状況となっています。

こうしたことから、血液の県内自給に向けて、今後さらに市町村や高知県赤十字血液センター等と連携し、若年層を中心とした県民に対する献血への理解と協力を積極的に呼びかけるとともに、医療機関での適正使用に向けた取り組みを進める必要があります。

現状と課題

1 献血者数と献血量

献血者数・献血量ともに年々減少傾向にあり、特に平成18年度の献血者数は、3万6千人を割り込み、昭和52年度以降で最も少なくなっています。



19年度は、4月～8月実績からの推計

2 献血率(献血可能人口に占める年間献血者数の割合)

本県の献血率は、全国平均を上回り7%台を維持していましたが、平成15年以降、全国的な状況と同様に低下傾向が続き、18年は6.6%まで減少しています。

献血率の推移

(単位: %)

年	H14	15	16	17	18	19
高知県	7.4	7.5	7.3	7.2	6.6	6.5
全国	6.2	6.1	6.0	5.7	5.5	5.4

19年は1月から8月実績による年間推計

3 400mL 献血者の割合（全血献血者に占める 400mL 献血者の割合）

本県の 400mL 献血の割合は、全国を大きく下回っています。これは、男性が 55.6%と全国平均の 63.9%を下回っているためであり、特に男性に対する取り組みが必要となっています。

400mL 献血者の割合

(単位：%)

年	H14	15	16	17	18	19
高知県	61.0	60.9	60.9	62.7	63.3	73.9
全 国	69.6	71.1	71.4	73.4	76.4	83.2

19年は1月～8月実績

4 血液製剤供給量（200mL 換算本数）

血液製剤は、他の医薬品と異なり人の血液に由来するため、有限で貴重なものです。また、国内での自給が求められており、その使用は適正であることが求められています。

人口 1,000 人あたりの供給本数は、本県では、全国平均を上回っており、さらに全国では減少傾向にもかかわらず、本県では増加傾向にあるため、医療機関での適正使用に向けた取り組みを進める必要があります。

血液製剤供給量（200mL 換算本数）の推移

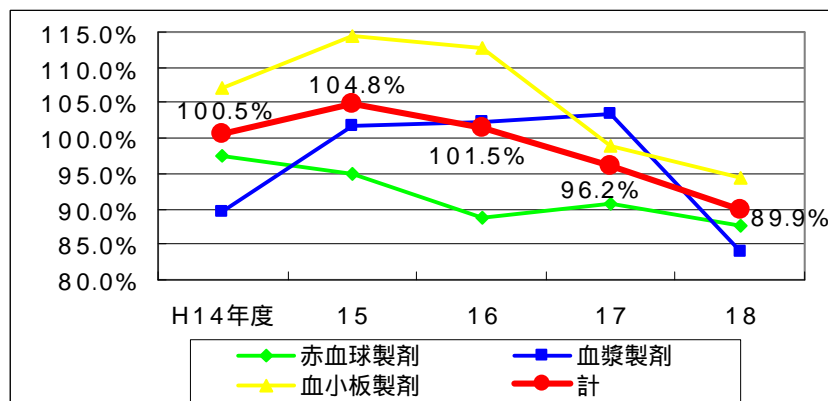
(単位：本)

年度		H14	15	16	17	18
県内供給本数		103,033	112,787	110,451	109,036	118,760
人口千人あたり	高知県	127.2	139.8	137.6	136.9	148.8
	全 国	134.9	132.8	130.4	129.0	126.6

5 血液製剤種類別の県内需給率

全体では平成 17 年度から 100%を割り込み、18 年度では 89.9%となっています。

特に、赤血球製剤については、県外への依存量が大きく、県内需給率は年々低下する傾向にあることから、400mL 献血者をさらに確保する必要があります。



対 策

1 献血思想の普及啓発

市町村や高知県赤十字血液センターと連携をとりながら、県民、企業等への協力要請を行うとともに、献血推進キャンペーンや献血功労者に対する表彰を行うなど、県民の理解と協力をもとめていきます。

(県)

2 400mL 献血および成分献血の推進

地域や職域、学校単位による献血推進組織等を育成するとともにライオンズクラブや学生ボランティア等との連携を強化し400mL 献血および成分献血の一層の普及を図ります。

(県)

3 血液製剤の適正使用の推進

医療機関や関係団体、高知県赤十字血液センター、県等による血液使用検討会議を開催し、医療機関における血液製剤の適正使用に向けた取り組みを推進します。

(県・関係機関)

